

小林隆久先生のご退職にあたって

宇都宮大学国際学部教授、小林隆久先生は、2006年3月末日を持って定年退職されることになりました。宇都宮大学教養部、国際学部、国際学研究科に対する先生の長年のご貢献に対して、この誌面をお借りして、心より感謝を表したいと思います。

小林隆久先生は、1940年（昭和15年）5月に東京でお生まれになり、1965年に東京大学経済学部経済学科をご卒業し、1969年に東京大学教養学部教養学科イギリス分科をご卒業されました。さらに、1972年に同大学大学院人文科学研究科比較文学専攻修士課程を修了し、文学修士を取得されました。経済学部をご卒業後、いすゞ自動車株式会社にお勤めになりました。その間、先生の胸中には、経済学ではなく文学研究への強い想いが去来したのだろうと推測しますが、この「転換」あるいは「元来の希望」であったのかという点については、先生から直接お話を聞かなければなりません。

小林先生は、1972年4月に宇都宮大学教養部の専任講師として赴任されました。そして1976年に同助教授、1987年に教授に昇任され、1994年10月に国際学部が設置されたと同時に、国際学部の教授に就任されました。小林先生は宇都宮大学で、34年の長きにわたり教育研究活動に従事し、多大なる貢献をなされました。

小林先生の研究は、イギリス文学、近代演劇比較論という専門分野を中心に多くの業績があり、ここすべてをご紹介することはできませんが、先生の代表作、単著『救済者としての都市』（木魂社、2003年）、共著『たのしく読める英米演劇』（ミネルヴァ書房、2001年）、共著『たのしく読めるイギリス文学』（ミネルヴァ書房、1994年）を挙げることができます。また先生は、日本英米文学会正会員、日本シェイクスピア協会正会員、東大比較文学会会員としてご活躍されてきました。

教育面では、教養部に赴任以来、英語教育にご尽力され、そして国際学部教授に就任されてからは、「近代比較演劇論」「近代比較演劇論演習」「イギリス文学史」「時事英語」等を担当され、国際学研究科では「演劇における伝統と現代」を院生諸氏に講義されてきました。小林先生は自らの教育に対する考え方について次のように語っています。教養の「英語」を担当するにあたって、多様な学部の学生がいるので「知的な好奇心を刺激して英語が面白い科目だと思ってもらう」ことに腐心したとのこと。まだ国際学部の「近代化比較演劇論」の授業は、「毎年熱心な学生が多く、やりがいがあり、半年の授業では語り尽くせなかった」という卒直な感想を述べられています。小林先生は卒論指導について、「やりがいもあったと同時に、自分も勉強する必要があったから、大変ではあったけれども楽しい共同作業でした。教師にとっても学生にとっても大切な、また長く思い出に残る仕事だと思います。」と語っています。「学生と同じ目線に立つ」という先生の教育に対する考え方は、先生が背筋を伸ばして講義をしている姿と重なります。

私は、小林先生と1983年以来、職場の先輩として、また教育、研究者の先輩としてご指導を受けて参りました。先生は一見寡黙のような印象を与えますが決してそうではありません。研究室にお願いがあつて、あるいはご意見を伺いに訪ねますと、紅茶等を入れてくださり、いっしょに飲みながら闊達にお話をしてくれます。もちろん私と違い、言葉を選びながらですが。私は大雑把な性格ということもあり、小林先生の的確なご指摘を受けてずいぶん勉強させられました。もちろん過去形ではなく、現在もそうなのですが。たぶん、先生は企業での職場生活、そして大学紛争から国立大学の法人化に至る軌跡を、文学者としての眼差しで人間の内面と行動をじっくりと観察してきたからこそ適切な助言を後輩にすることができるのだと思います。

小林隆久先生の宇都宮大学教養部、国際学部、国際学研究科での教育研究、学生指導等に対する多大なるご貢献に感謝すると同時に、先生のこれからの益々のご発展とご健勝をお祈り申し上げます。

2005年11月30日

国際学部長 北島 滋